

## 空間版メネラウスの定理

四面体 ABCD がある。線分 AB, BC, CD, DA 上にそれぞれ点 P, Q, R, S がある。点 P, Q, R, S は同一平面上にあり、四面体のどの頂点とも異なるとする。

- (1) PQ と RS が平行であるとき、等式

$$\frac{AP}{PB} \cdot \frac{BQ}{QC} \cdot \frac{CR}{RD} \cdot \frac{DS}{SA} = 1$$

が成り立つことを示せ。

- (2) PQ と RS が平行でないとき、等式

$$\frac{AP}{PB} \cdot \frac{BQ}{QC} \cdot \frac{CR}{RD} \cdot \frac{DS}{SA} = 1$$

が成り立つことを示せ。

< '15 埼玉大 >

### 【戦略】

- (1) 愚直に

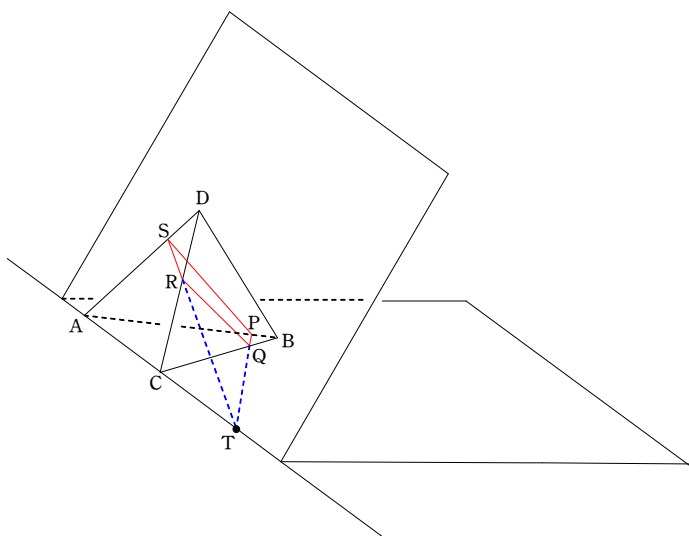
$$AP:PB=p:1-p, \quad BQ:QC=q:1-q$$

$$CR:RD=r:1-r, \quad DS:SA=s:1-s$$

などと比率を設定し、ベクトルで処理していきます。

セオリー通り、「1つの始点、3つの基底」という言葉に従い A を始点とし、登場人物を  $\vec{AB}$ ,  $\vec{AC}$ ,  $\vec{AD}$  で表し、 $\vec{RS}=k\vec{PQ}$  という条件から得られる関係式から迫っていけばよいでしょう。

- (2) 平行でないとなると実はありがたい



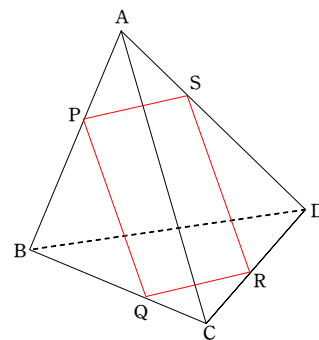
という構図となるため、

$$\begin{cases} \triangle ABC \text{ と直線 } PQ \\ \triangle ACD \text{ と直線 } RS \end{cases}$$

に対して、メネラウスの定理を用いると即解決できる形が現れます。

### 【解答】

- (1)  $AP:PB=p:1-p$   
 $BQ:QC=q:1-q$   
 $CR:RD=r:1-r$   
 $DS:SA=s:1-s$



とする。

$$\begin{aligned} \vec{PQ} &= \vec{AQ} - \vec{AP} \\ &= (1-q)\vec{AB} + q\vec{AC} - p\vec{AB} \\ &= (1-q-p)\vec{AB} + q\vec{AC} \quad \dots \textcircled{1} \end{aligned}$$

$$\begin{aligned} \vec{RS} &= \vec{AS} - \vec{AR} \\ &= (1-s)\vec{AD} - \{(1-r)\vec{AC} + r\vec{AD}\} \\ &= -(1-r)\vec{AC} + (1-s-r)\vec{AD} \quad \dots \textcircled{2} \end{aligned}$$

$\vec{PQ} \parallel \vec{RS}$  であるとき、

$$\vec{RS} = k\vec{PQ} \quad \dots \textcircled{3} \quad (k \text{ は } k \neq 0 \text{ を満たす実数})$$

と表せ、①、② を③に代入すると

$$-(1-r)\vec{AC} + (1-s-r)\vec{AD} = k\{(1-q-p)\vec{AB} + q\vec{AC}\}$$

これを整理すると

$$k(1-p-q)\vec{AB} + (kq+1-r)\vec{AC} - (1-s-r)\vec{AD} = \vec{0}$$

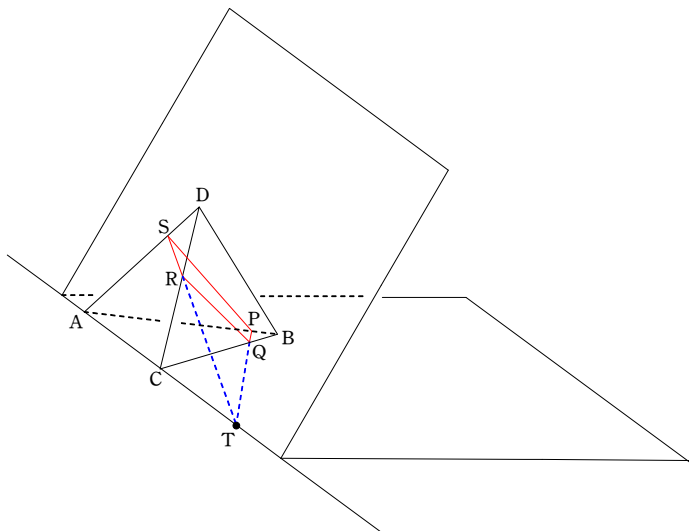
$\vec{AB}$ ,  $\vec{AC}$ ,  $\vec{AD}$  は1次独立であるため

$$\begin{cases} 1-p-q=0 & \dots \text{I} \\ kq+1-r=0 \\ 1-s-r=0 & \dots \text{II} \end{cases}$$

$$\begin{aligned} \frac{AP}{PB} \cdot \frac{BQ}{QC} \cdot \frac{CR}{RD} \cdot \frac{DS}{SA} &= \frac{p}{1-p} \cdot \frac{q}{1-q} \cdot \frac{r}{1-r} \cdot \frac{s}{1-s} \\ &= \frac{p}{1-p} \cdot \frac{1-p}{p} \cdot \frac{r}{1-r} \cdot \frac{1-r}{r} \quad (\because \text{I, II}) \\ &= 1 \end{aligned}$$

となり、示された。

(2)



条件から P, Q, R, S は同一平面上の点で、直線 PQ, RS は平行でないで、空間において直線 PQ, RS は交点 T をもつ。

ねじれの位置にならない

直線 PQ は平面 ABC 上の直線  
直線 RS は平面 ACD 上の直線

ゆえに、直線 PQ, RS の交点 T は平面 ABC 上かつ平面 ACD 上

すなわち、T は平面 ABC と平面 ACD の交線上にある。

平面 ABC において、 $\triangle ABC$  と直線 PQ に対してメネラウスの定理より

$$\frac{AP}{PB} \cdot \frac{BQ}{QC} \cdot \frac{CT}{TA} = 1 \dots (*)$$

平面 ACD において、 $\triangle ACD$  と直線 RS に対してメネラウスの定理より

$$\frac{AS}{SD} \cdot \frac{DR}{RC} \cdot \frac{CT}{TA} = 1 \dots (**)$$

(\*), (\*\*) から、 $\frac{CT}{TA}$  を消去すると

$$\frac{AP}{PB} \cdot \frac{BQ}{QC} = \frac{AS}{SD} \cdot \frac{DR}{RC}$$

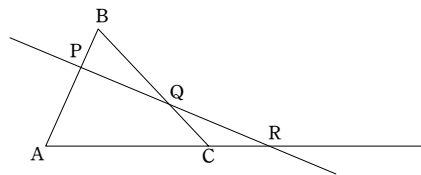
ゆえに

$$\frac{AP}{PB} \cdot \frac{BQ}{QC} \cdot \frac{CR}{RD} \cdot \frac{DS}{SA} = 1$$

が成り立つ。

【総括】

平面版のメネラウスの定理は



というように

$\triangle ABC$  を直線でぶった切ったときの切り口の点 (交点) P, Q, R に対し

$$\frac{AP}{PB} \cdot \frac{BQ}{QC} \cdot \frac{CR}{RA} = 1$$

というように、頂点からスタートし、

頂点 → 交点 → 頂点 → 交点 → 頂点 → 交点 → 頂点  
A P B Q C R A

と頂点と交点を交互に踏みながら1周すると、比率の積が1となるという定理です。

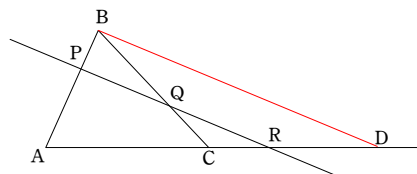
今回の(2)の主張は

四面体 ABCD を平面でぶった切ったときの切り口の点 P, Q, R, S に対し

$$\frac{AP}{PB} \cdot \frac{BQ}{QC} \cdot \frac{CR}{RD} \cdot \frac{DS}{SA} = 1$$

というように、頂点と交点を交互に踏みながら1周すると、比率の積が1となるということを主張しており、まさに空間版メネラウスの定理です。

【確認：平面版メネラウスの定理の証明】



図のように、平行線を引く。

$\triangle CQR \sim \triangle CBD$  より、 $\frac{BQ}{QC} = \frac{DR}{RC}$

$\triangle ARP \sim \triangle ADB$  より、 $\frac{AP}{PB} = \frac{AR}{RD}$

よって、

$$\frac{AP}{PB} \cdot \frac{BQ}{QC} \cdot \frac{CR}{RA} = \frac{AR}{RD} \cdot \frac{DR}{RC} \cdot \frac{CR}{RA} = 1$$